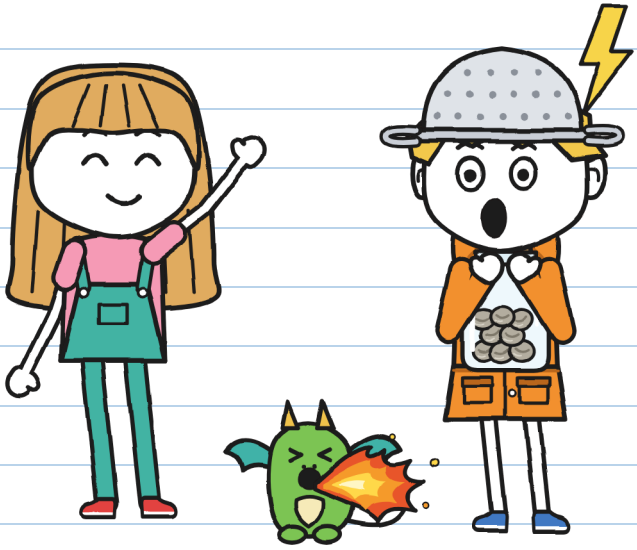
ありえない はいたつ・2

かみなり まえに あけるな

Lui Eriksson



（グニの ノート）

サイズ M
中級・9+

ありえない はいたつ・2
かみなり まえに あけるな

文と絵：**Lui Eriksson**

サイズ **M**・中級・9+

日本語版：**LinguAula**

初版：2026

© 2026 **Lui Eriksson** · **info@linguaula.com**

自由にコピーして、学校でも家でも使えます。

シリーズの 2さつめ。1さつめは「このにもつは かみつく」。

LinguAula

linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

この本(ほん)を書(か)いているあいだに、けがをしたかみなりは一(ひと)つもいない。 —J.



そして、ほかのだれのものでもない。 ―J

見つけても、かみなり前に開けちゃだめだよ。

おはなしのなかだけ

このはんこは、お話の中だけのことをしめす：きみはやらないで。何ページもつづくときは、「ここから」と「ここまで」が書いてある。本当のあらしのときは、76ページを見て。 ―J.

だれが だれ？



グニ。どようびの はいたつやさん。あらしの ハンター（まあ、だいたい）。この ノートは グニの。



フリータ。いなびかりから かみなりまでの びょうすうを かぞえる。みどりで かいて、「J.」と サインする。



パンくず。ドラゴンの こ。グニの まねを なんでも する。ほんとうに なんでも。



トニョ。じてんしゃで イナズマびんの はいたつを する。じっぷんで とどかなければ タダ。



フローラ。うんがどおり9ばんちの にわし。いしには サインしない。



ベラさん。フローラの いえの となりの ドラゴンの いえで、ドラゴンの せわを している。パンくずは ベラさんと くらして いる。



マラさん。「ありえない はいたつ」の てんしゅ。まじょの ぼうしを かぶって いる。いうより ずっと おおくを しって いる。

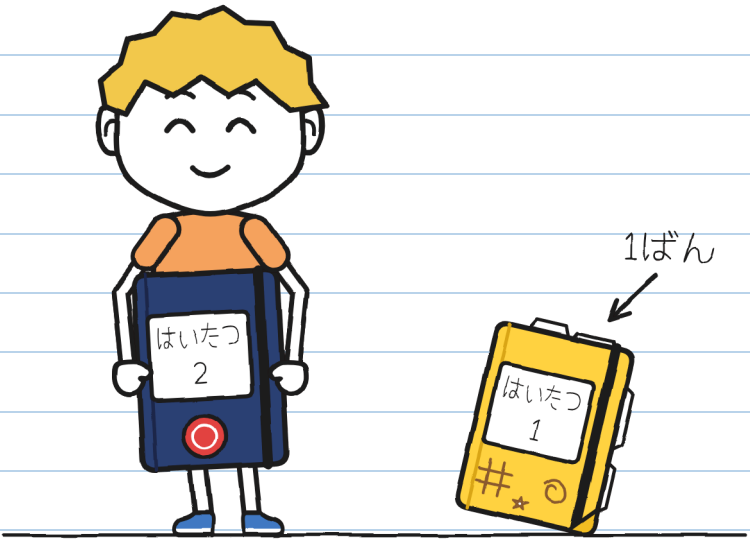


R.は、だれにも とどけられない にもつを おくるひと。その なまえを だれも いわない。

グニの
はいたつノート2

公式。

「公式」ってことは、わたしが先に読むってこと。公式に。 —J.



ノート1はいっぱいになってしまった。これは店のマラさんが、はんこをおしてくれたものだ。公式のノートに絵をかいてはいけないそうだ。さあ、どうかな。

第1章

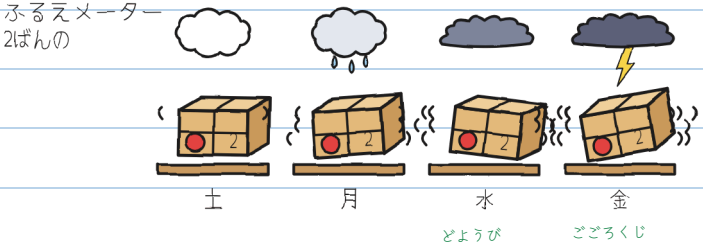
あらしの ハンター

マラさんの店には、ふるえる荷物がある。先週の土曜日から、日ごとに少しずつひどくなっている。

ぼくはさわらないと決めた。

この前フリータとぼくがとどけたのはたまごだったが、今ではぼくのまねを何でもするドラゴンの子、パンくずだ。

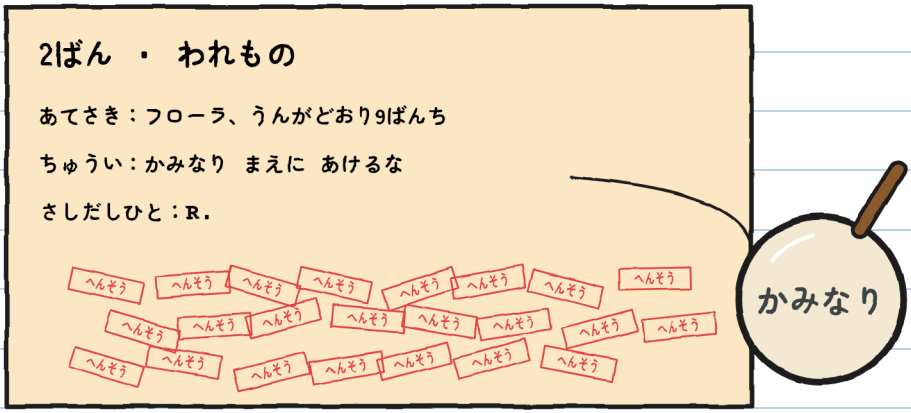
店の中、ぼくの家のむかいには、もどってきた荷物があと十九こある。ふるえているのは、ほかの荷物よりあせっている。



どようび　ごごろくじ

こわくてふるえているんじゃない。土曜日の午後六時にあらしが来るから。てんきよほうを六回たしかめた。 —J.

もどってきた荷物をうけとった人は、きえないインクでラベルにサインをしなければならない。フリータのみどりのペンのようなインクだ。しないと、夜明けにたなへとんでもどってしまう。ぜんぶ送っているのは同じ人：R.



2番の荷物には、「へんそう」のはんこが二十三こおされていた。

二十三。二回数えた。 —J.

「二十三回、わたしが運んだ」とマラさんは言った。
「でもあらしの日は一度もなかった」

土曜日の十時、マラさんがカウンターで2番の荷物を持って待っていた。トニョもいた。土曜日は、三人とも1番の荷物をかってにとどけたばつで、店にいなければならない。

「これは」とマラさんは言った。「あなたたちがとどけなさい。今日の午後に」



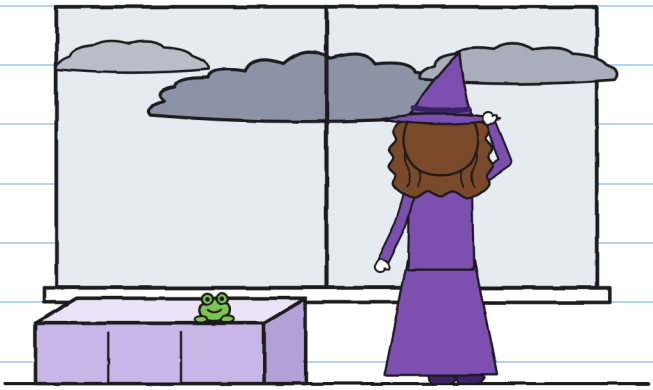
フリータはあまり高くとんだので、「のこり19」のふだにもう少しでさわるところだった。

マラさんは三つのじょうけんを出して、指で数えた：

1. 五時、あらしの前に出発する。あらしがすぎるまでフローラの家にいる。
2. 家族もフローラも、もう知っている。
3. きまりはラベルのとおり：かみなり前にはあけない。それも頭の真上のかみなりで、遠くのは数えない。

「マラさんは行かないの？」とフリータが聞いた。

「わたしはここにやることがある」とマラさんは言って、ショーウィンドウから空を見た。空はだんだんはいいろになっていた。



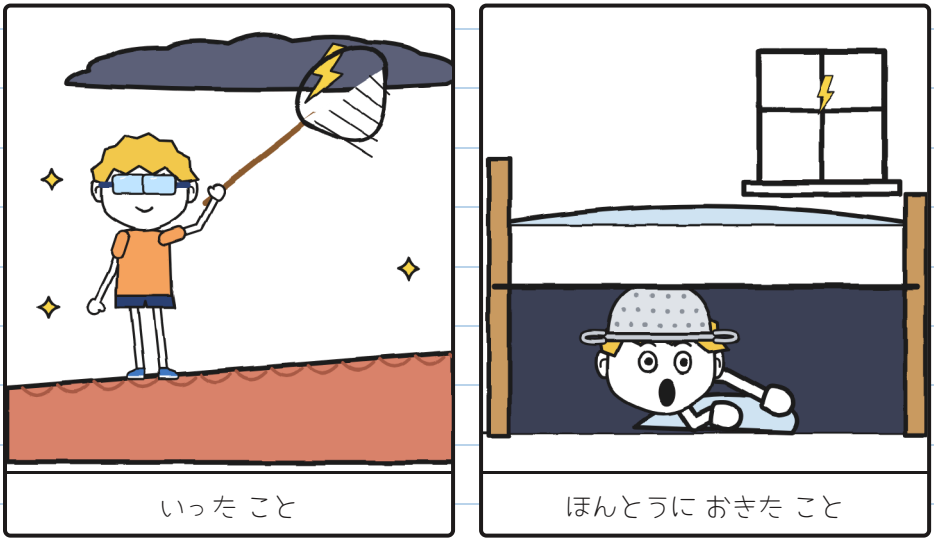
やることってなに？ —J.

フリータがぼくを見(み)た。

「グニはあらしがすき？」

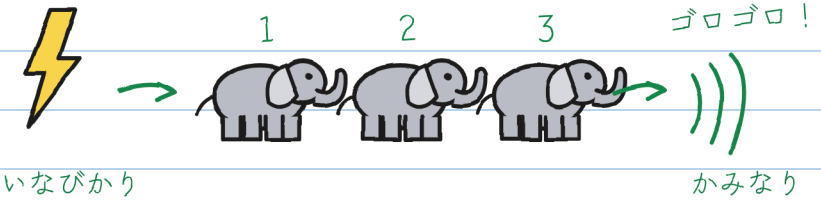
そんなふうに見(み)られたときに言(い)うことを言(い)った：

「だいすきだよ。前(まえ)に住(す)んでいた町(まち)では、プロのあらしのハンターだったんだ」



ベッドの下(した)のプロだね。 —J.

フリータはぼくのノートに、かってにあらしの数え方を書いた。いつものことだ：



ぞう1とう、ぞう2とう、ぞう3とう……

ぞう1とう＝1びょう

ぞう3とう＝1キロ（だいたい）

ぞう0とう＝まうえ！

↖ これが ラベルの かみなり。
とおくの かみなりでは あかない。

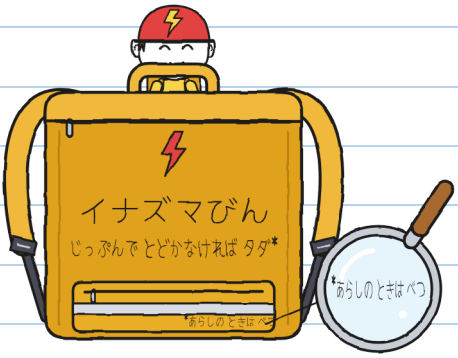
ぞうが おおい ほど、その いなびかりは とおくに おちた。

かみなりが きこえたら、とおくても：なかへ！

知っていることは、こわさがへる。 —J.

数える必要はなかった：あらしはだいすきなんだ。でも念のため、書いておいた。

トニョがぼくのかたごしにラベルを読んだ。
「イナズマ便は、あらしの日にはとどけない」
トニョはリュックの小さい字をゆびさした。
「まだあらしじゃないでしょ」とフリータが言った。
トニョは読み直した。「まだ」とは書いてなかった。

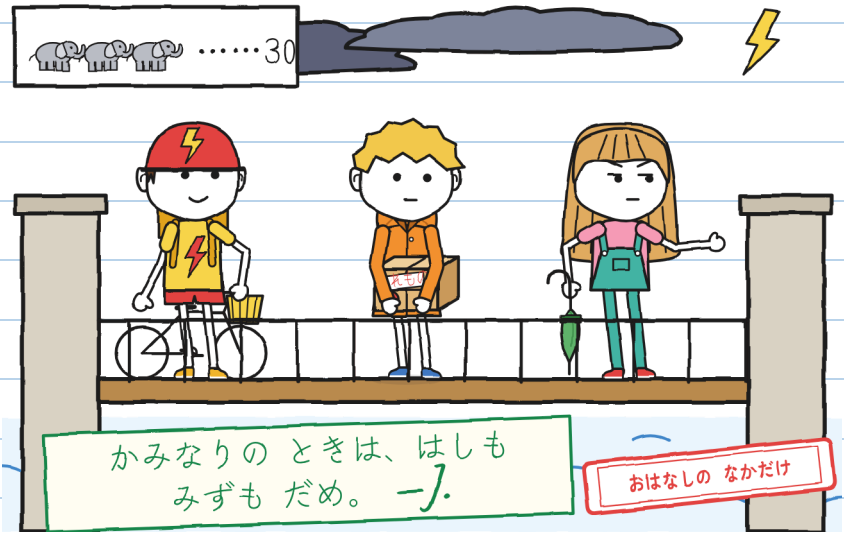


小さい字は、小さすぎた。 —J.

トニョはぼくたちについてきた。
五時に家へ行って、レインコートを取ってきた。
「オレンジのを着ていきなさい」とお母さん。「本当に行くの？ かみなりが鳴ると……」
「いってきまーす、お母さん！」

「鳴ると……」って？ —J.

ぼくたちは、空がもうまっ黒になったおおはしをわたった。夜には船が通れるようにはしが上がる。まん中で、フリータは手をふって水にあいさつした。まじめな顔で：うんがとフリータはなかが悪い。



遠くで空が光った。フリータはかみなりが鳴るまでぞうを30とう数えた。

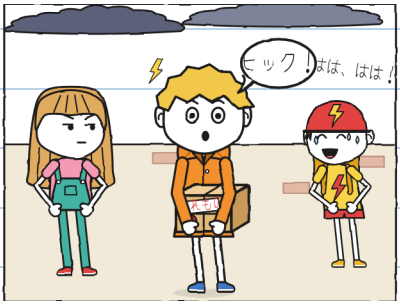
ゴロゴロ。

「あのいなびかりまで十キロくらいね」とフリータは言った。「てんきよほうでは、あらしは六時ごろ着く」

「かみなりが鳴った！」とトニョが言った。「もうあけていい？」

「あれじゃ荷物はあかない」とフリータは言った。「ラベルのは、いなびかりと同時に鳴るやつ：ぞう0とう。でももう聞こえるから、それで十分：中にかくれよう！」うんが通りまで走った。ぼくは耳が聞こえないふりをした。

「今の、ヒック？」とフリータが聞いた。
「ちがう」とぼくは言った。「ヒック！」



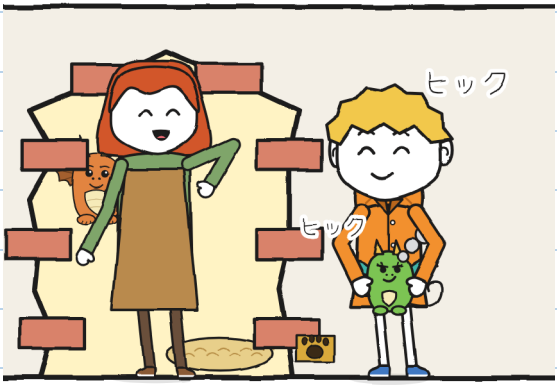
小さいころから、かみなりのときだけ：かみなりが鳴るたびに、しゃっくりがつづけて出る。三秒に一回。あらしが真上に来ると止まらない。こわいんじゃない。体がぼくに聞かずにやるんだ。

それをこわいって言うの。 —J.

ドラゴンの世話をするベラさんが、フローラの家のとなりの入り口で、パンくずをだいて待っていた。土曜日は、パンくずはぼくとさんぽだ。

「今日はフローラの家までよ。はじめてのあらしなの」とベラさんは言って、パンくずをわたしてくれた。「グニのまねを何でもする。気もちまで。おびえても、引っぱっちゃだめ：しがみつくから。あらしがすんだら、へいを三回たたいて。すぐさがしに行く」

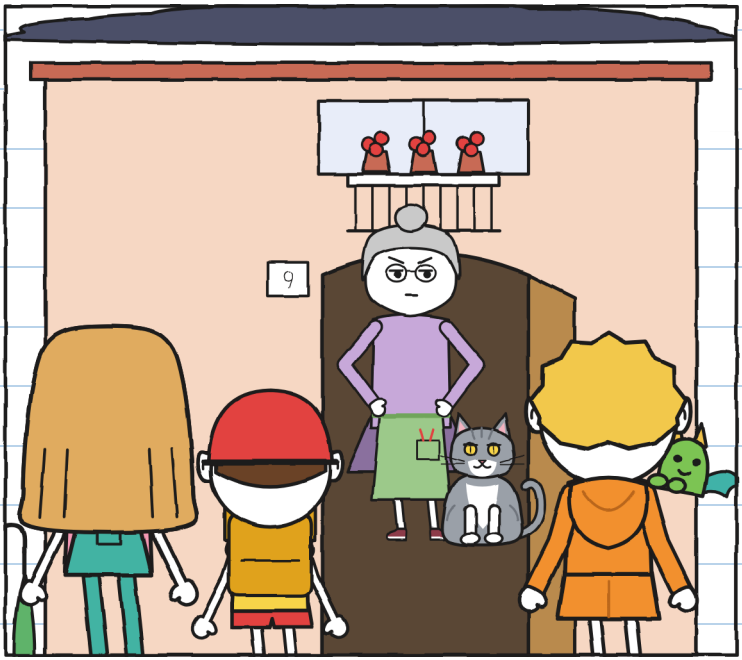
「ぼくは何も感じないよ」とぼくは言った。「あらしはだいすきなんだ」



遠くでかみなりが鳴った。ぼくはヒック。パンくずもヒックと言って、はなからけむりを出した。

「すぐ中に入りなさい」とベラさんは言った。

フローラの家は、ゼラニウムの家だ。二週間まえの土曜日、ぼくたちがドラゴンの家の入り口をさがしていたとき、フローラはあのベランダから見ていた。入り口は、かべみたいに見える。



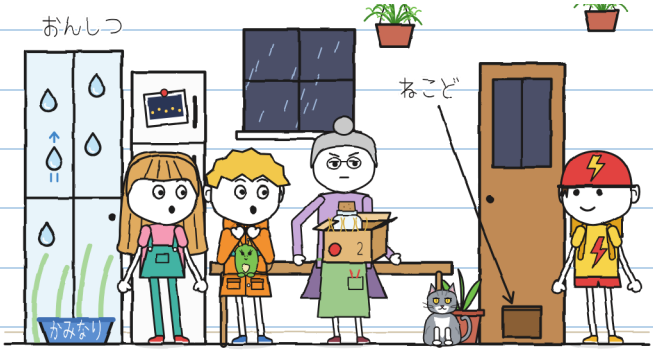
フローラはぼくたちがノックする前にドアをあけて、箱と空とパンくずを見た。

「ベラのところの子ね。わたしのシダをこがさないでよ」と言った。「入りなさい、雨が来るよ。先に言っておくけど、わたしは石にはサインしないからね」

第 2 章

カミナリ！

フローラの台所は、てんじょうからつるしたものまで植物でいっぱいだ。おくのガラスのドアは温室に、ねこ戸のあるうしろのドアは庭につながっている。トニョは雨なので、自転車をろうかに入れた。
ガラスのドアには、かいた水のつぶがあった。一つがガラスをのぼりはじめた。

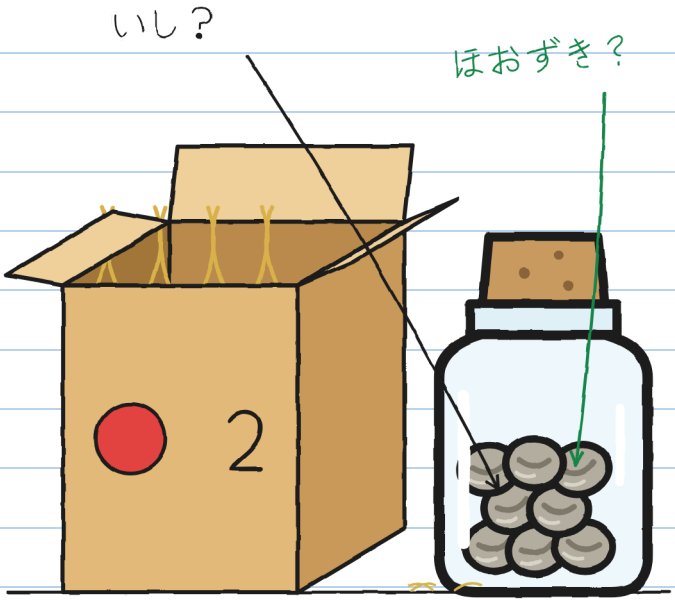


「R.のまほうのガラスよ」とフローラは言った。「ほしいときだけ雨を通す。かみなりは通さない」
水のつぶはのぼりつづけた。行き先は聞かないことにした。

フローラは箱をテーブルに置いて、開かずにあけた。中にはわらと、はいいろの小さな玉が八つ入ったガラスのびんがあった。

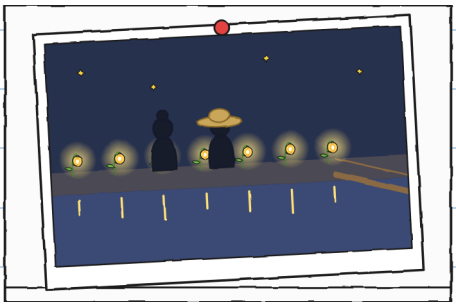
「かみなり前にはあけちゃだめって書いてある！」とフリータがさけんだ。

「あけたのは箱で、びんじゃないよ」とフローラは言った。「中身は知ってる。R.はほおずきをくれるって言って、石をよこすの」



「ほおずきってなに？」とぼくは言った。

フローラはれいぞうこから古い写真をはがして見せた。夜のうんがぞいの道で、岸に小さなあかりがならんでいる。



「植物なのよ」とフローラは言った。「いなびかりの光をためて、夜じゅうてらす」

「R.が植えていたの？」

「目ざめたたねを持ってきたのよ。わたしは土を入れた。ねむったたねは一度も見たことがない」

「ほおずきは？」

「消えたの。R.が来なくなって。今はこれをよこす」

だから夜のうんがはくらく、いたのはしはあんなにこわい。うんがをわたる一まいの板だ。

こわかった。わたしはとくに：くらやみでわたった。 —J.

「R.はいつもやくそくをまもる」とフローラは言った。

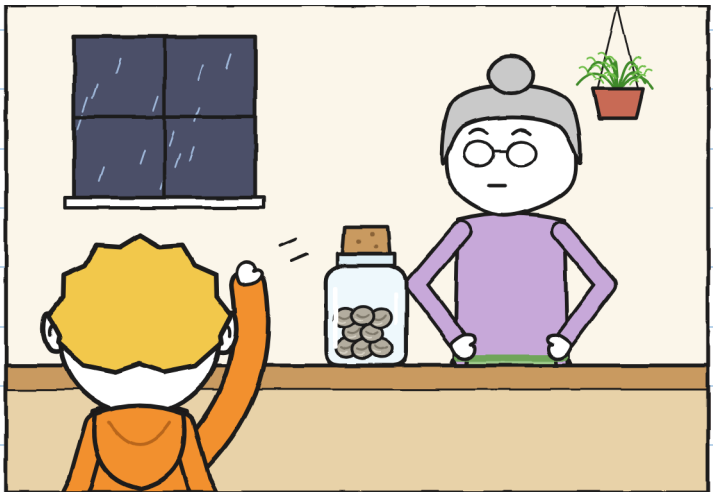
「おそいけどね。でもこれだけはちがう。このびんは二十三回とどいて、二十三回、石だった」

ぼくはラベルを思い出した。ぜんぶおぼえていた。

「フローラさんは、かみなりを待ってからあけたことがありますか？」とぼくは聞いた。

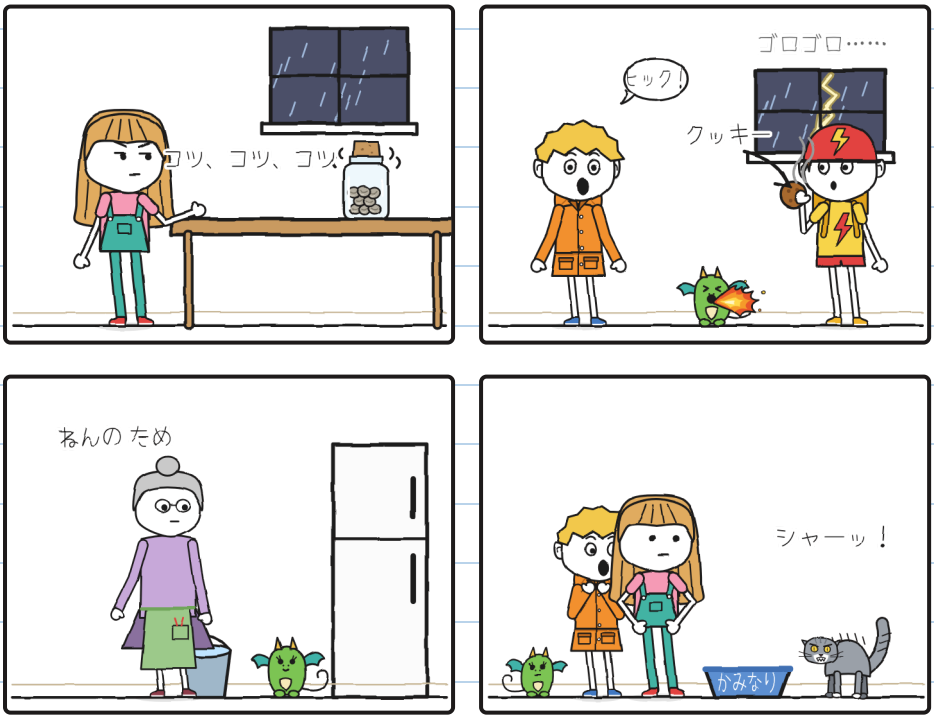
フローラは、水はぬれるかと聞かれたみたいな顔でぼくを見た。

「わたしはだれも待たないよ」と言った。「かみなりだってね」



フローラのねこはカミナリ（えさ入れに名前が書いてある）。はいいろで、のどを鳴らす音はほんとうのかみなりみたいだ。

待っているあいだ、台所ではいろいろおきて、何もおきなかった：



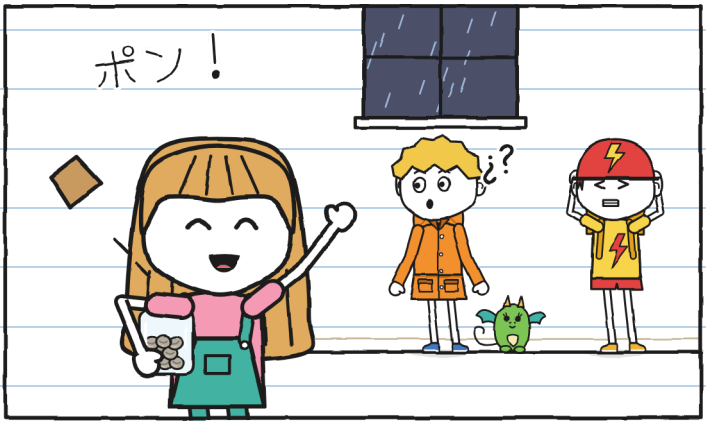
かみなりでいちばんいやなのは、待つこと。 —J.

びんはだんだん大きくチリン、チリンと鳴った。フリータは小さい声で数えた：「ぞう12とう」。「9とう」。テーブルの下で、あしがはねている。

「ゆかにあながあくよ」とぼくは言った。
「数えてるの」
「でもあしのほうが数えるのがはやいよ」
そのときパンくずがまた小さな火をふいて、カミナリはねこ戸から庭へとび出した。フローラはうしろのドアをあけて、大声でよんだ：
「カミナリーーー！」



そしてフリータがびんをあけた。



「かみなりが鳴った！」とフリータは言った。

かみなりは鳴っていなかった。さけんだのはフローラだ。カミナリはねこの名前なのだ。

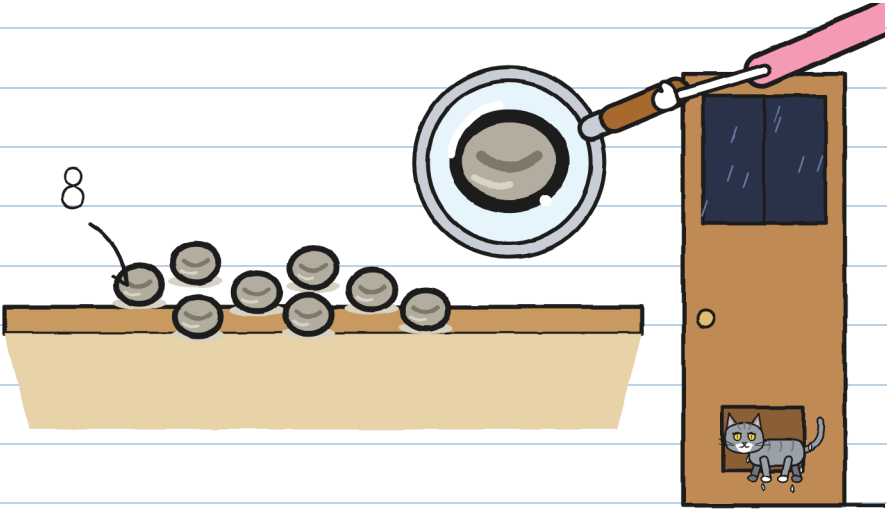
「カミナリ！」って聞こえたの。ちょうど待っていた言葉。ねこの名前だなんて、だれも教えてくれなかった。 —J.

それを17ページにはった。

そのページはあとで読んだ。 —J.

あけると、びんはチリチリいわなくなった。中にはいろの玉が八つ、つめたくてうごかない。フリータは玉をテーブルに出して、虫めがねで見た。

「すじがあるね」とフリータは言った。「とじた目みたい」



カミナリがびしょぬれでねこ戸からもどって、フローラはドアをしめた。

「石ね。いつもどおり」と言って、フリータを見た。

フリータの顔は、シャツと同じ色になった。

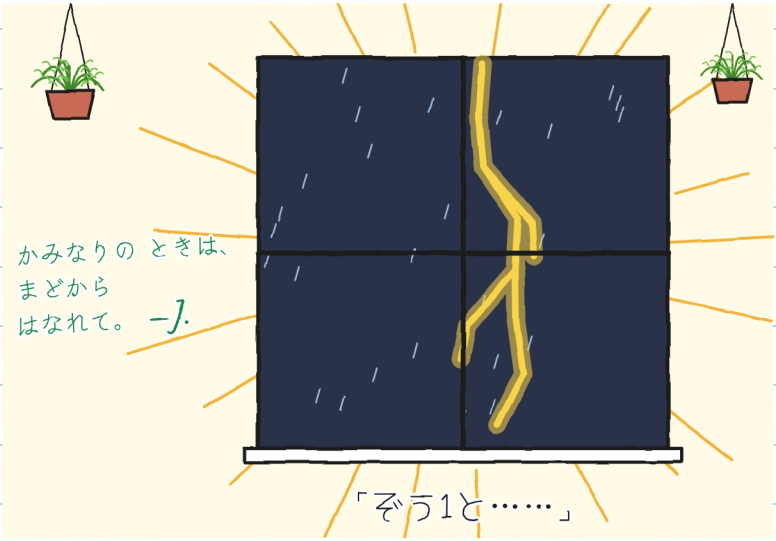
「ねむってるんだ」とぼくは言った。「石じゃなくてたねだよ。だから『かみなり前にあけるな』って書いてある。もしかしたら、ガラスがふるえるくらい大きなかみなりが起こしてくれる」

フローラはしばらくだまっていた。

「たねなら、しょうめいしてみなさい」

外はもう夜みたいにくらいのに、まだ六時だった。

いなびかり。フリータは数えはじめた：



そしてついにほんものが来た。



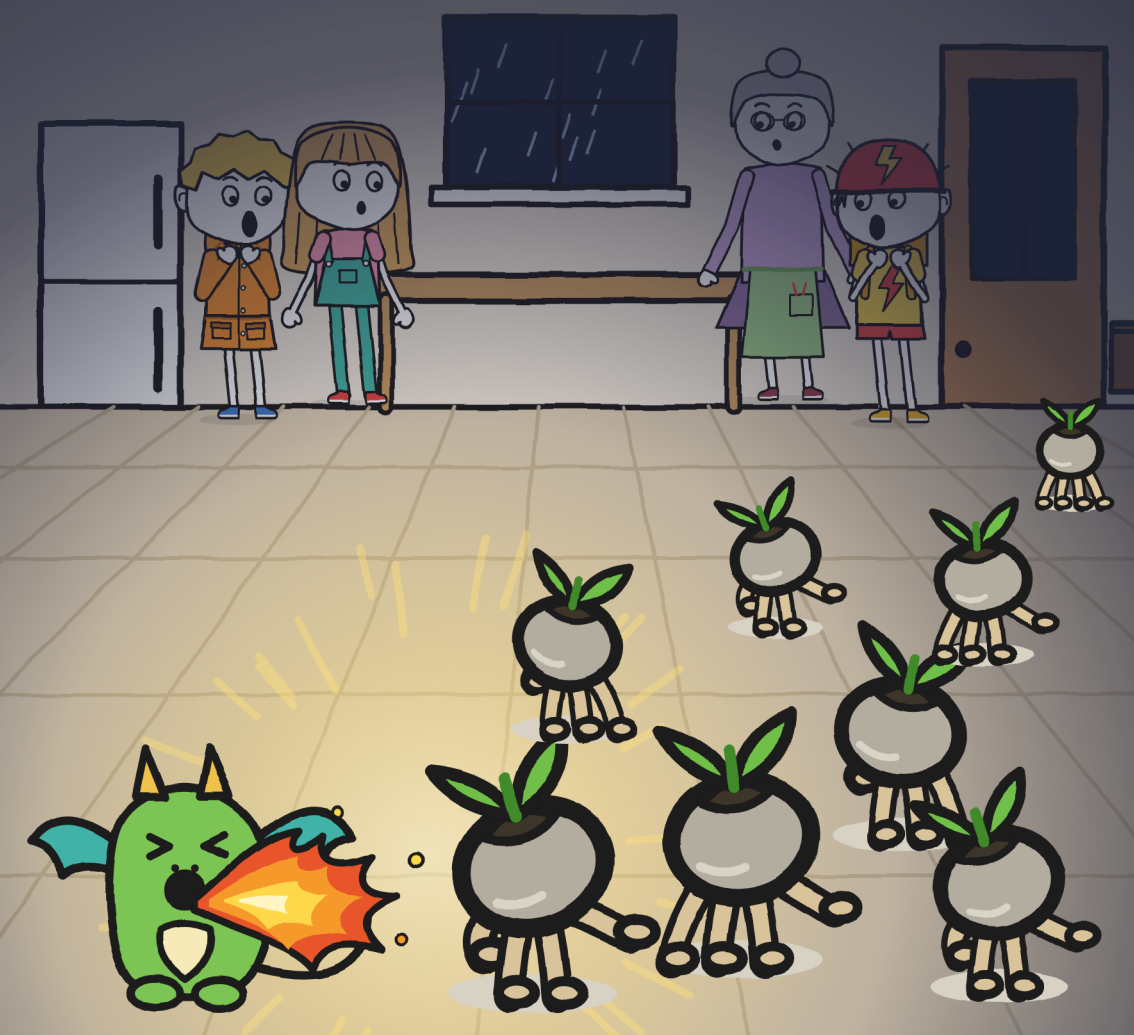
かみなりがいなびかりといっしょに来(き)た。あらしは真上(まうえ)だ。テーブルも、コップも、ガラスもふるえた。

そしてでんきがきえた。

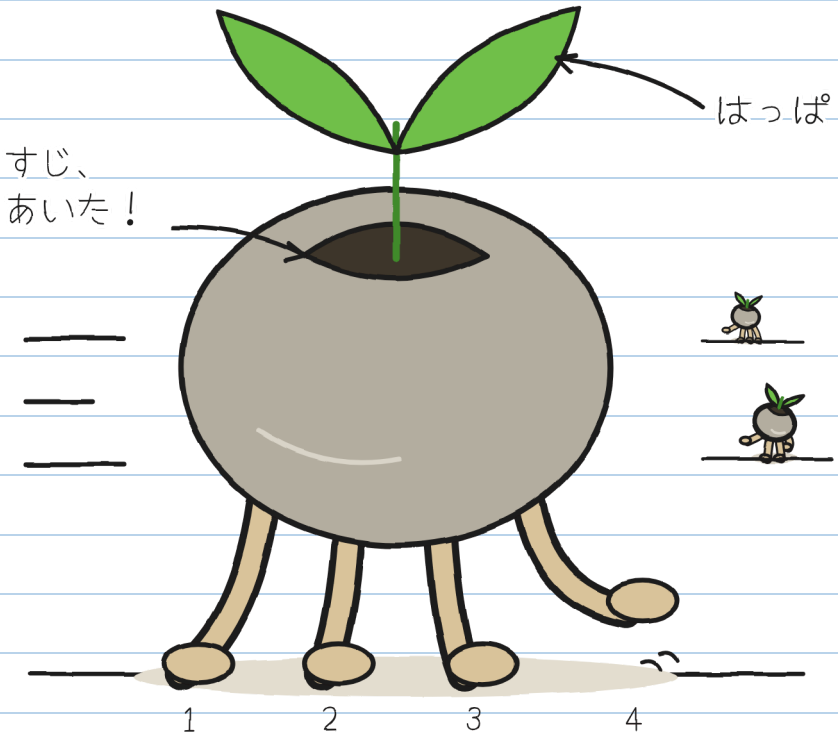


ぼくはヒック。パンくずもヒックと言って、ボウッと火をふいて、台所が一秒明るくなった。

テーブルはからっぽだった。



ほおずきの たね
（めざめた）



ねの ちいさな あし 4ほん

石(いし)に足(あし)があった。

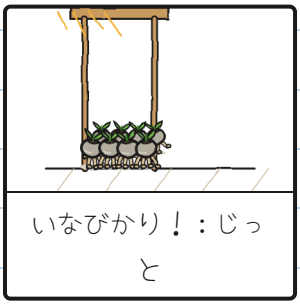
それと、いそいでいる。 -J.

第3章

みないと うごく

くらやみの中で、小さな雨の音がした：トト、トト、トト。次のいなびかりでは、玉はさっきより遠くにあって、じっとしていた。ぴたっと。何もしていないふりで。

玉ははやく走ったが、いなびかりが光るたびに止まった。いなびかりはたくさんあった。ぼくはテーブルの下から見ていた。フローラのざるをかぶって。うちでも、かみなりが鳴るとかぶるんだ。



いなびかり！：じっと



くらやみ：はしる



いなびかり！：じっと。もっと とおく。

だるまさんがころんだ。たねで。 —J.

フローラがライトをたねに向けると、たねは止まった。
別のたねに向けると、さいしょのは走り出した。

「たねだ！目ざめてる！」とフローラはさけんだ。

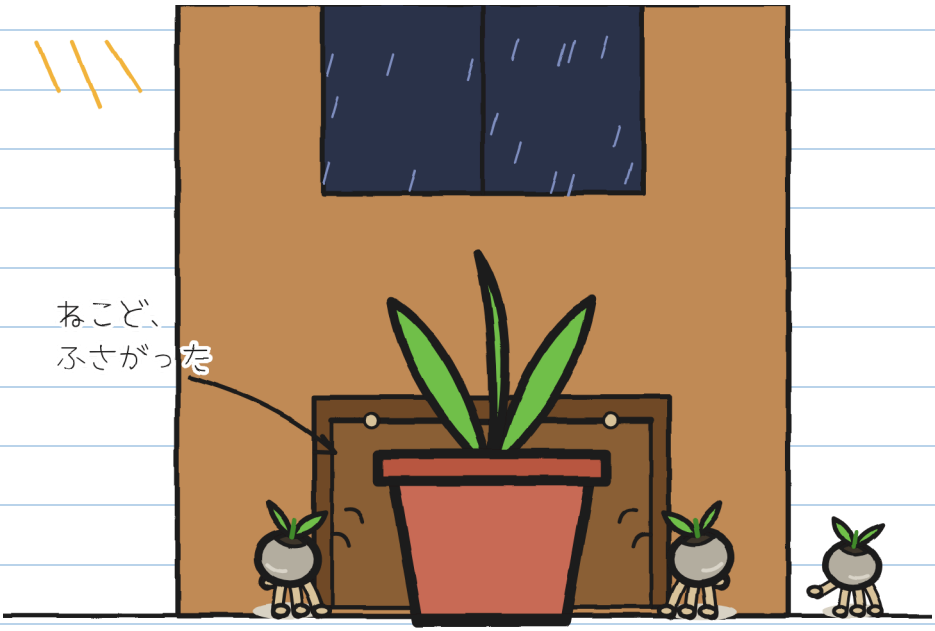


二つめのたねは、フローラがライトをはずすとすぐ
走った。
「もう一つライトがいる」とぼくは言った。
「ほかのことを考えなさい。これ一つしかないんだ」

たねは八つで、ライトは一つ。計算が合わない。

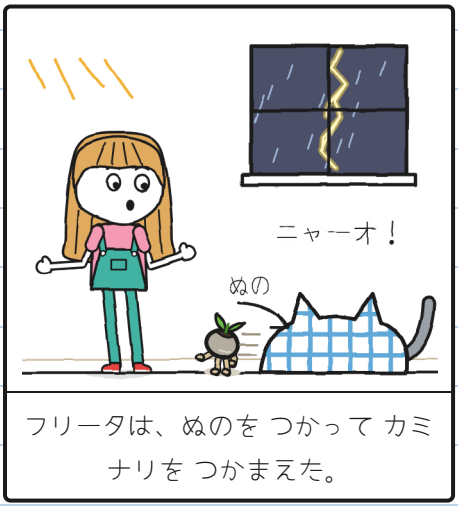
たねはみんなねこ戸へ向かった。

「あらしのぬれた土をさがしているのよ」とフローラは言って、大きなはちを前においた。「家の土は水道の水の土だけ。外には土がほとんどない。石だたみと小道とうんがだけ。出たら、雨で水にながされる」



ねこ戸はふさがったが、たねは台所じゅうにちらばった。かくれる場所は百もある。

あらゆることをやってみた：



フリータは、ぬのを つかって カミナリを つかまえた。



トニョは てで：カミナリが トニョを つかまえた。



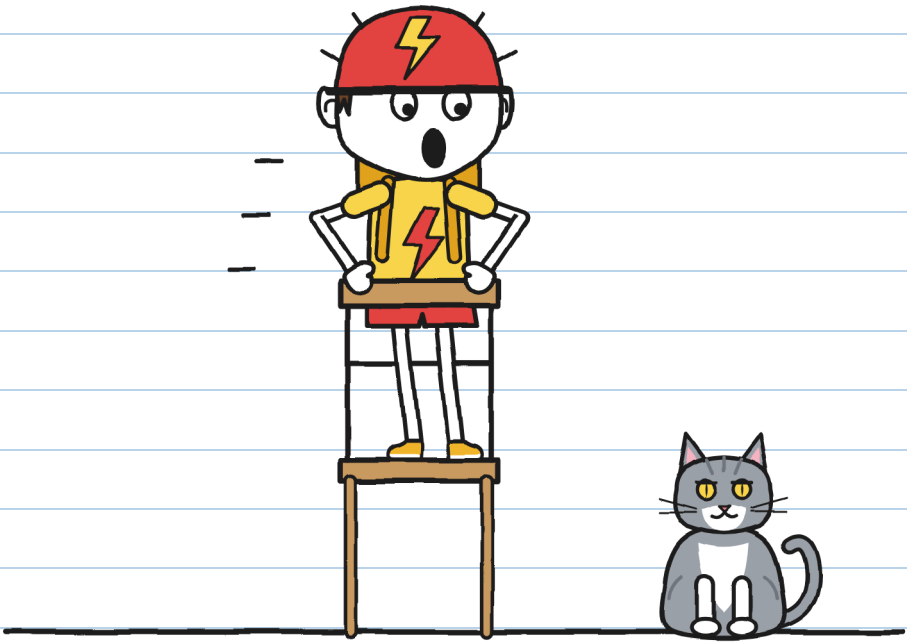
パンくずは、ひで：ひとつ！



フローラは、ライトで：ふたつ！

カミナリもおいかけた：くらくてもよく見(み)える。ぼくたちはだめだ。

トニョはあらしはこわくない。トニョがこわいのは、ねこだ。



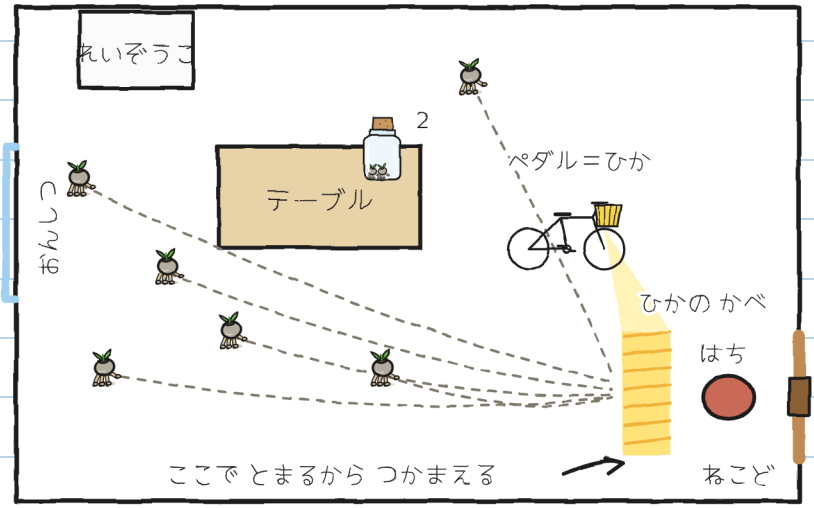
「ねこじゃないって！」とフリータが言った。「カミナリだよ！」

「もっとこわい！」

びっくりが二つ、名前はひとつ。 ―J.

ぼくはまだテーブルの下で、ざるをかぶったままだった。そこからは、いなびかりのたびにゆかぜんぶが見えた。

たねはちらばっても、けっきょくねこ戸へもどった。同じはちをおしに。



ぼくは地図をかいた。

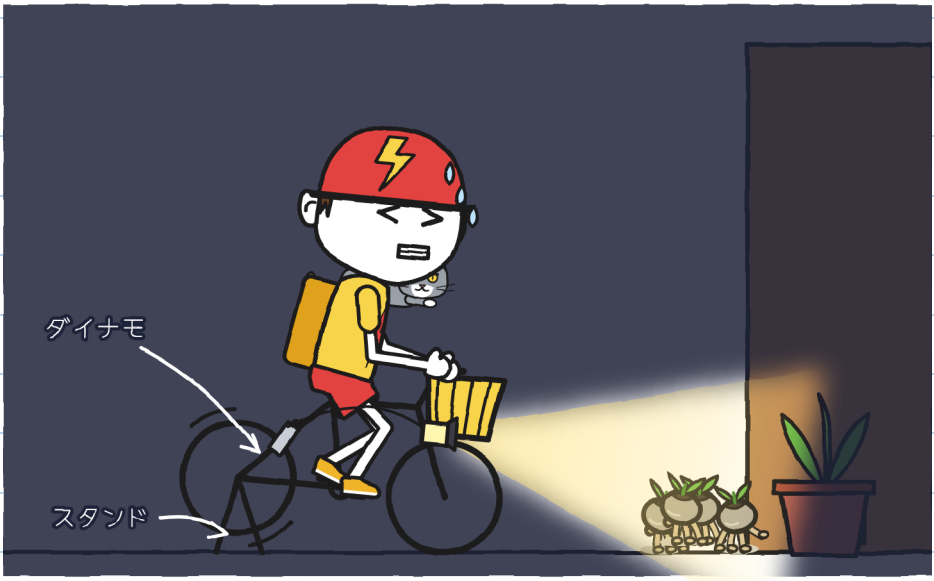
「トニョ、ライトはペダルをこぐとつく？」

「もちろん」

「じゃあ、今日は光をはいたつして」

自転車をスタンドで立て、ライトをねこ戸に向けた。イナズマ便のダイナモは後ろの車輪についている：回れば光る。そしてトニョがこいだ。

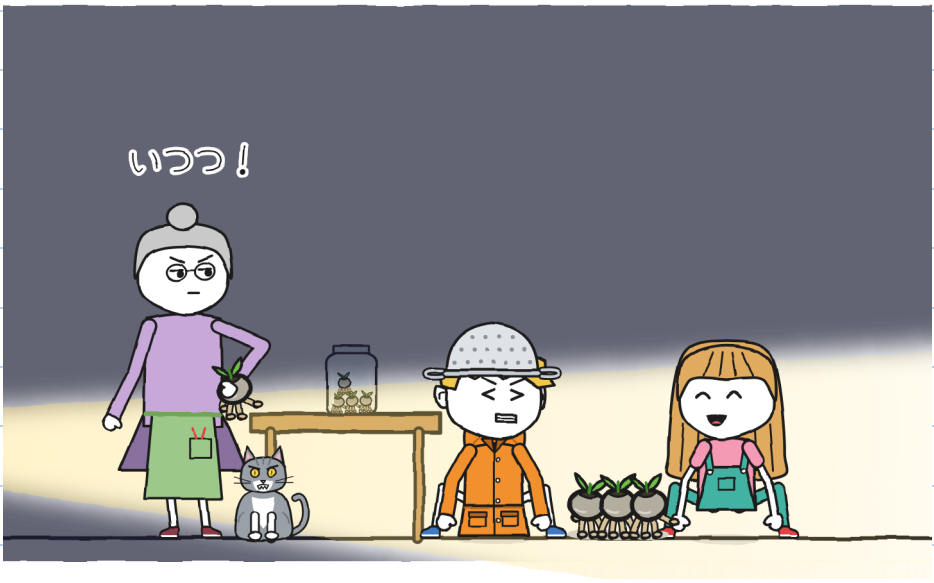
トニョはいままででいちばんはやくこいだ。とくに、カミナリが上にとびのったときは。



ついにイナズマ便がやくに立った。 —J.

たねは光のところまで来ると止まり、ぼくたちは一つずつびんに入れた。三つ。四つ。

カミナリも口で一つつかまえて、フローラはそれを指二本で取り上げた。
「五つ！」と言った。



六つ。

フローラは一つもにげないようにびんにふたをして、ぼくたちを手つだおうとかがんだ。するとカミナリがテーブルにとびのって、びんをたおした。

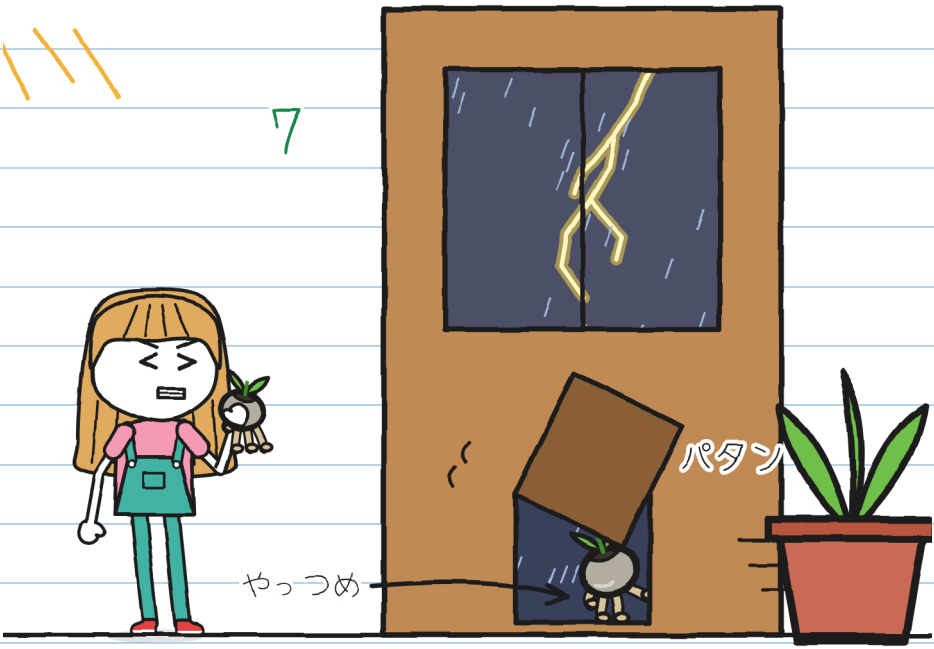


トニョは空中でつかまえた。
「イナズマ便」とトニョは言った。「一秒でとどけなければタダ」

でもトニョはもうこいでおらず、ライトが消えた。カミナリを止められる人はいない：ねこ戸へまっしぐらだ。

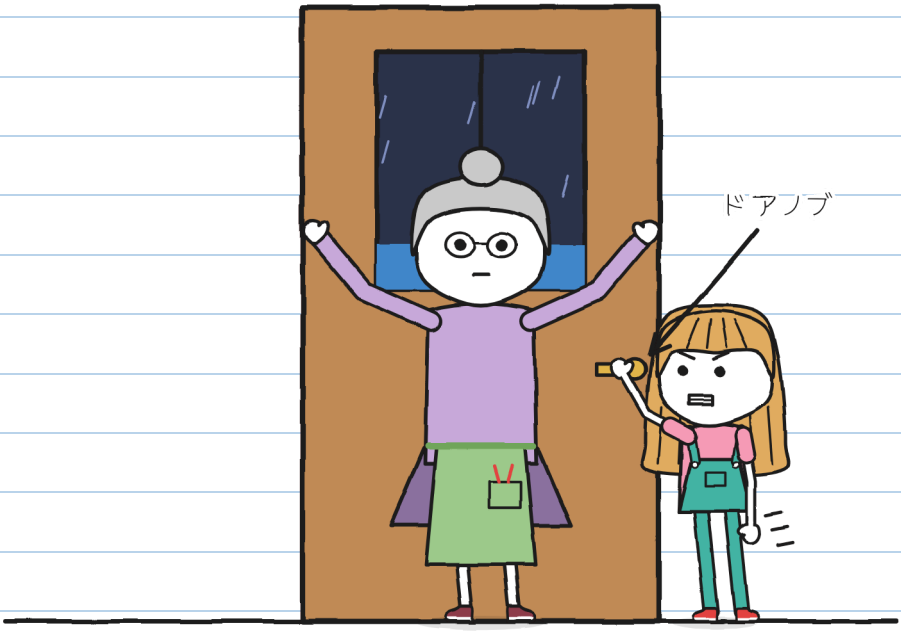
くらやみで：トト、トト、トト。カミナリがゴトッとはちをおして、ねこ戸がパタンと鳴った。

次のいなびかりで、ゆかにのこっていたのはたねが一つ。フリータがつかまえた。七つ。



八つめはねこ戸から出ていってしまっていた。

「取りに行く！」とフリータは、ドアノブにしがみついて言った。
「かみなりが落ちるときはだれも出さないよ」とフローラはドアの前に立った。話し合うつもりはなさそうだった。



フリータは言いかえさなかったが、ドアノブもはなさなかった。
しばらくして、ねこ戸がパタン。びしょぬれのカミナリだった。八つめはなし。

「いなびかり……ぞう1とう、ぞう2とう」
ゴロゴロ。
「2とう」とフリータは数えた。「まだすぐ近くだ」

「じゃあ植えよう」とフローラは言った。「あらしが行ってしまう前に。それもくらやみで」
「温室で？」とフリータは聞いた。
フローラはガラスをのぼる水のつぶを指さした。
「まほうはまだきいている。ここにはかみなりは入れない」



フローラはパンくずを見て、「くらやみで」とくり返した。

パンくずがぼくのほうを見た。そしてヒック。

第4章

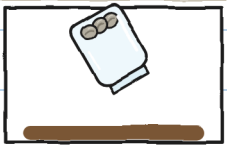
ヒック

フローラがほおずきの植え方を教えてくれた。R.に教わったとおりだ。ぼくは公式の文字で書いた：

ほおずきの うえかた

1. 

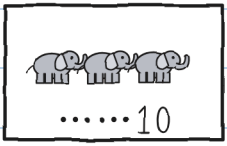
あらしの ぬれた つち。
（みずみちの みずの つちは だめ）

2. 

つちの うえで びんを あける。
（その まえに あけると、にげる）

3. 

ぜんぶ くらやみで：たねは ひとりで つちに もぐる。
（じぶんで うめると、めが でない）

4. 

あらしが すぎる まえに：
ぞうが 10とうより おおいと、
つぎの あらしまで もう うわらない。

目ざめさせるにはぞう0とう。植えるには10とうまで。11とうでねむる。 —J.

フローラはてんじょうのまどのハンドルを回した。まどはあかなかったが、かいた水のつぶが下へおりはじめ、ほんものの雨がガラスを通りぬけた。
雨は花だん、つまり土がいっぱいの長いテーブルにふった。
「ぜんぶ花だんへ。ゆかには一てきもだめ」とフローラは雨に言いつけた。



このガラスはお話の中だけ。本当のあらしでは、温室にはぜったい入らない（76ページ）。 —J.

「あらしのぬれた土よ」と言った。「さあ、ぜんぶくらやみで」

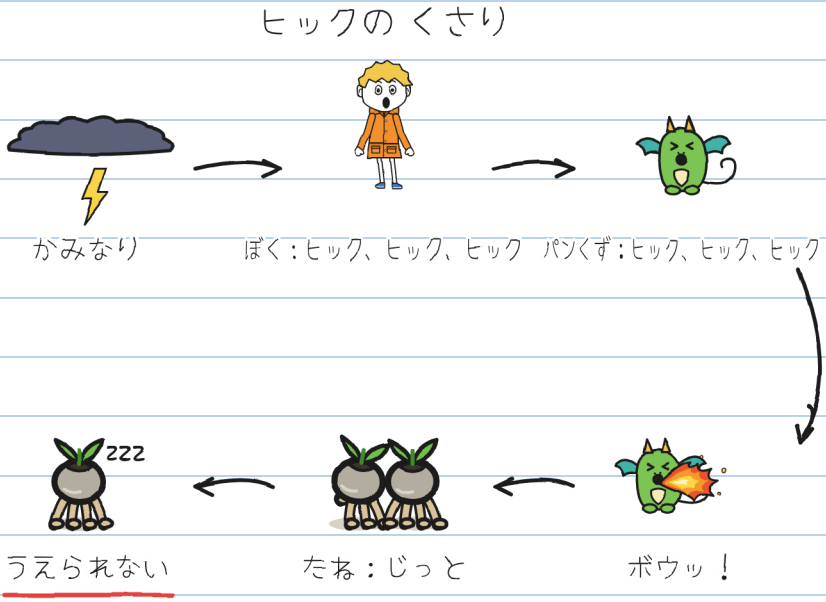
でもパンくずはもう中にいた：だれにも見られずに、フローラの足の間をすりぬけて。花だんの下の、はちの間にいた。

フローラはそっと引っぱった。パンくずは四本の足ではちにしがみついた。ベラさんが言っていたとおりだ。



台所のぼくのヒックのたびに、温室でパンくずが火をふいた。

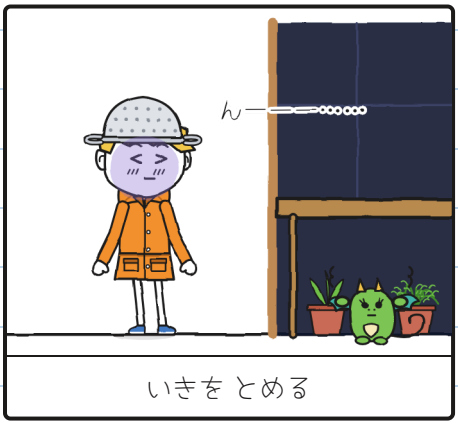
わかるようにかいた：



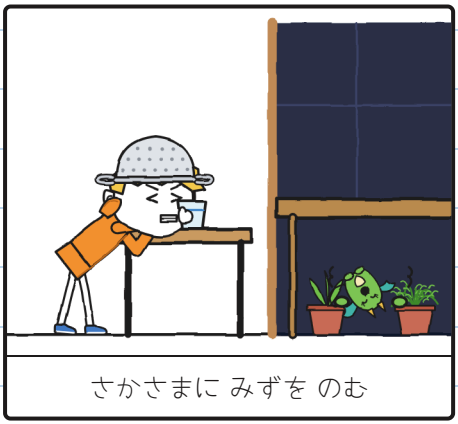
台所では、ヒックがやくに立った：火、じっとするたね、つかまるたね。温室ではちがう：三秒ごとに火が出て、たねが土に入るのにいるくらやみの時間が、いつもなかった。

くさりを切らなきゃ。いちばん切りやすいところはあなた。あいをこめて。 —J.

しゃっくりにききそうなことはぜんぶやった：



いきを とめる



さかさまに みずを のむ



おどかす



さとう

パンくずははちからはなれずに、ぜんぶまねした。

おまじない：ゼロ。ヒック：たくさん。 —J.

フリータは数えた：「ぞう4とう」。「5とう」。
かみなりが鳴った。
「あのいなびかりはさっきより遠いね」。

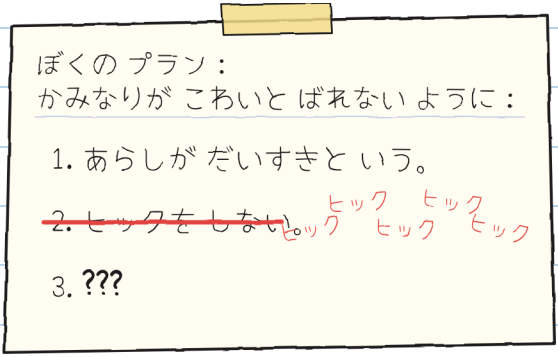
七つのたねがびんの出口をさがしてぐるぐる回っていた。ぼくのヒックは止まらない。



「11になったら？」とぼくは聞いた。
「また石ね」
フリータはびんを見るのをやめて、ぼくを見た。

「パンくずは、グニのこわさをまねしているの」とフリータは言った。
「じゃあほかのものをまねすればいい」とぼくは言った。
ぼくはヒックした。温室でまた火がボウッと出た。
「外に出してあげたら？」とぼくは聞いた。
「しがみつくよ。見たでしょ」
フリータは声をひそめた。
「まず、そばにいてあげて」

こわさをなおす方法はなくて、かくすプランがあるだけ。それももうだめだった：



3は？ —J.

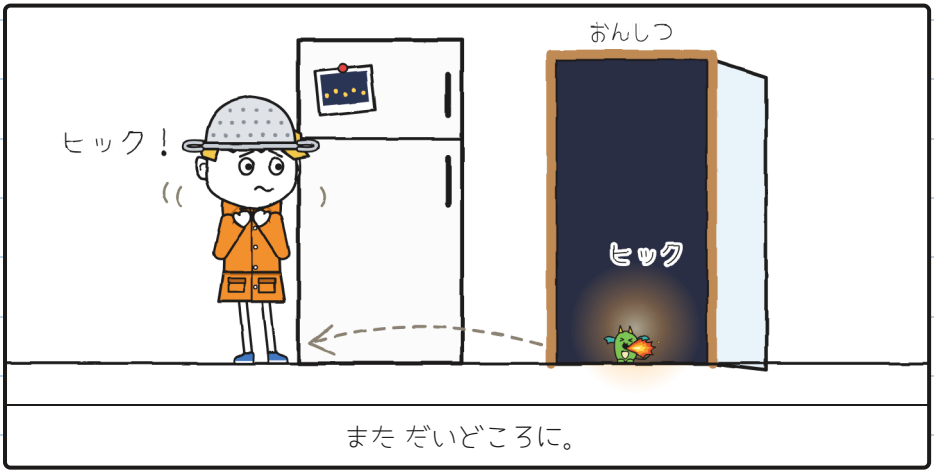
ためした。ほんとうに。



かたあしを なかに。



かみなり。



また だいどころに。

温室（おんしつ）は、町（まち）じゅうでいちばんかみなりが大（おお）きくひびく場所（ばしょ）だ。

入り口から上を見ると、ガラスのてんじょうごしに、二つのいなびかりのあいだに、屋根よりもずっと高いところに見えた：ベラさんのドラゴンたちが、あらしの中をとんでいる。だれも空を見ていないときに、とびに出るんだ。だからベラさんはぼくたちと来なかった：あらしのときは、家でドラゴンたちのみはりだ。



ドラゴンたちはヒックをしなかった。

「行こう、あらしのハンター」とトニョは言った。

あとから来るはずのじょうだんを待った。来なかった。

ざるをぬいで、フローラにわたした。フローラはほんもののヘルメットのように持った。



そしてぼくは入った。

ざるはかみなりをふせげない。こわさには、ときどききく。 —J.

雨は、千本のゆびでガラスをたたくような音を立てていた。ぼくは花だんの下にもぐり、パンくずはそこでまるくなって、ぼくみたいにふるえていた。



ゴロゴロ！ぼくはヒック。パンくずもヒック。火がぼくたち二人をてらした。

ぼくたちは、花だんの下のあらしのハンター二人。

入り口から、フリータが小さな声で、わらわずに言った：



「かぞえよう。わたしがいる」

第5章

かぞえよう、わたしがいる

数えた：フリータは入り口で、ぼくは花だんの下で、パンくずはぼくにぴったりくっついてふるえていた。

いなびかり。
「ぞう1とう、2とう、3とう、4とう、5とう、6とう」
ゴロゴロ。
「6とうなら二キロくらいね」とフリータは言った。「あのいなびかりはさっきより遠くに落ちた。このまま中にいよう」



ぞうを6とう数えた。こわいのはまだ消えない。
「あらしがだいすき」と言うのはやくに立たなかった。
ヒックをしないように歯をくいしばるのも。

パンくずがぼくを見た。まだやっていないことをためした。

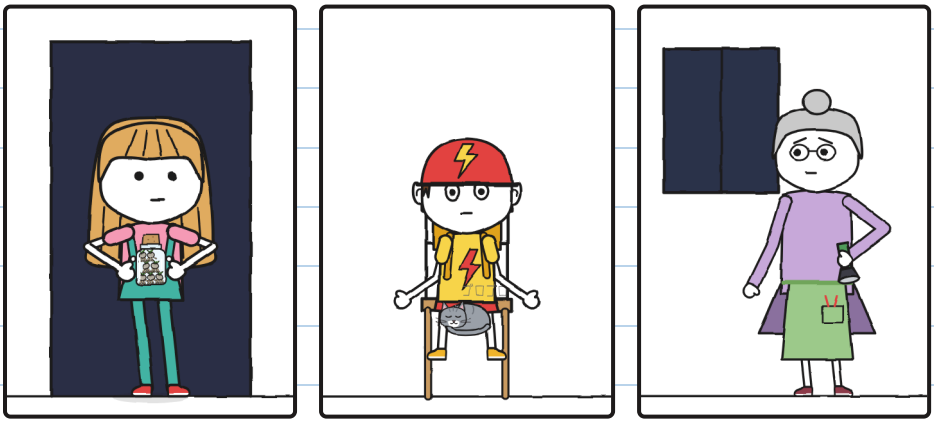


「かみなりがこわいんだ」

「知ってる」とフリータは言った。「今朝、6ページにかいていたでしょ。待っていたの」

「おれはねこだ」とトニョは言った。カミナリがひざでねむっていて、動けないでいた。

「わたしは、来ないものを待つのがこわい」とフローラは言った。「だから、これまではとどくとすぐびんをあけていたのよ」



わたしははし。それは知っていたでしょ。 —J.

だれもわらわなかった。雨は同じようにふっていたが、花だんの下で、ぼくはもうひとりじゃなかった。

ぼくはゆっくりいきをした。パンくずも。



いなびかり。ぼくたちはいっしょに九つまで数えた。ゴロゴロ。

そしてヒックは出なかった：そのかみなりでも、次のでも。

「今！」とフローラがささやいた。

フリータはつま先で入って、びんをぬれた土の上に置き、ふたをあけた。それから音を立てずに入り口へもどった。

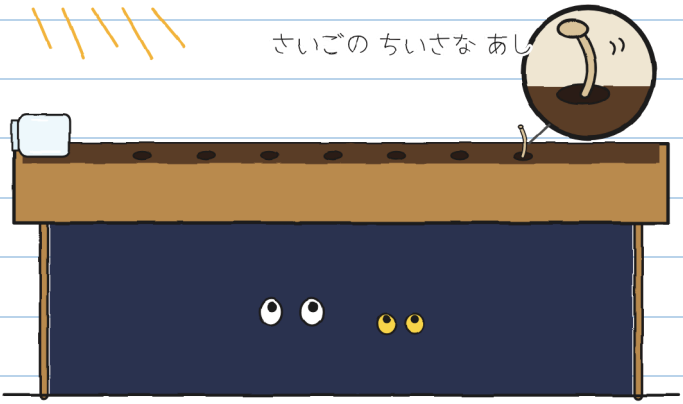


トト、トト、トト。くらやみの中、びんから何かが出てきた。

遠くでいなびかり。ぼくたちは声を出さずにぞうを10とう数えた。ゴロゴロ。

十は、間に合う最後の数。

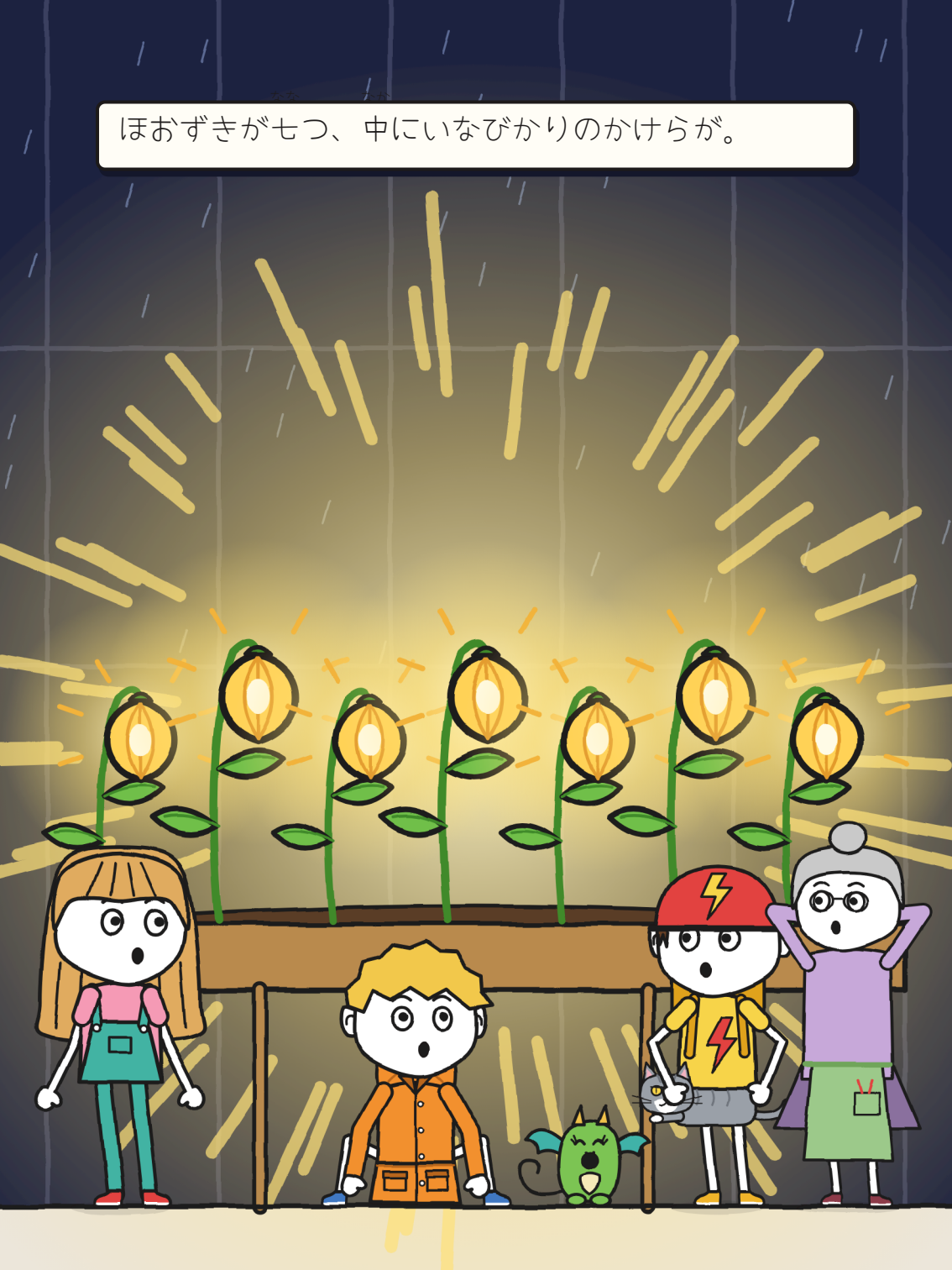
次のいなびかりで見えた：



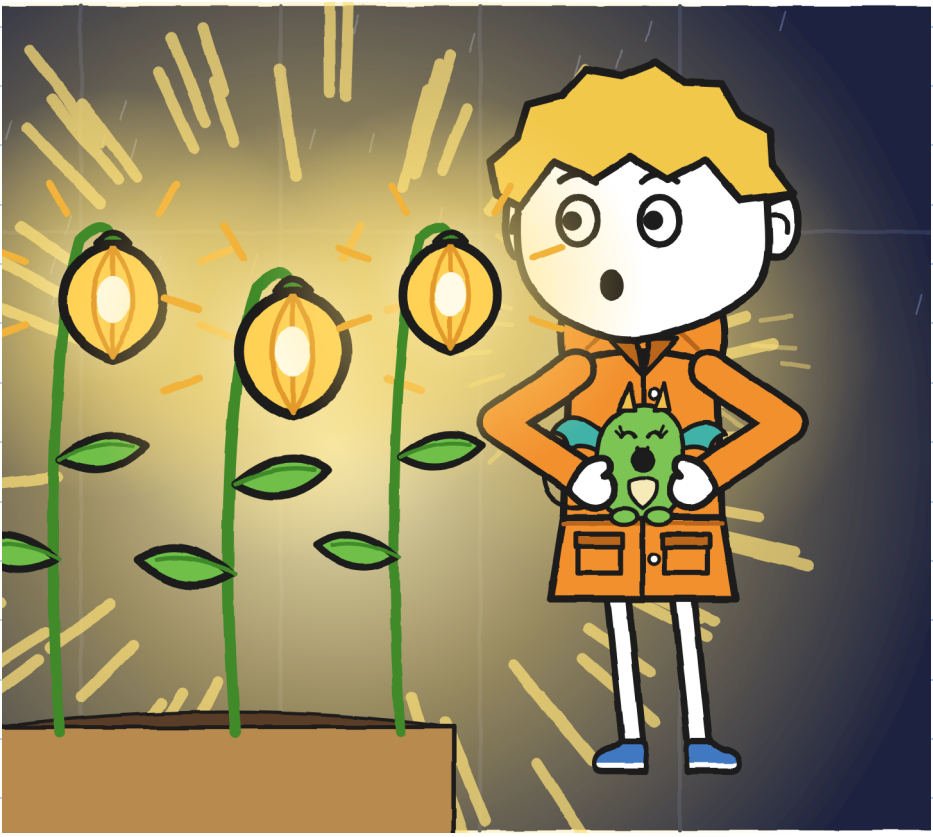
びんはからっぽ。土に小さなあなが七つあって、いちばんさいごのあなにはまだ小さな足がのぞいていた。

それから、しばらく何もなかった：ぼくたちだけ、くらやみの中で土を見つめて。

そのとき、さいしょのが光った。

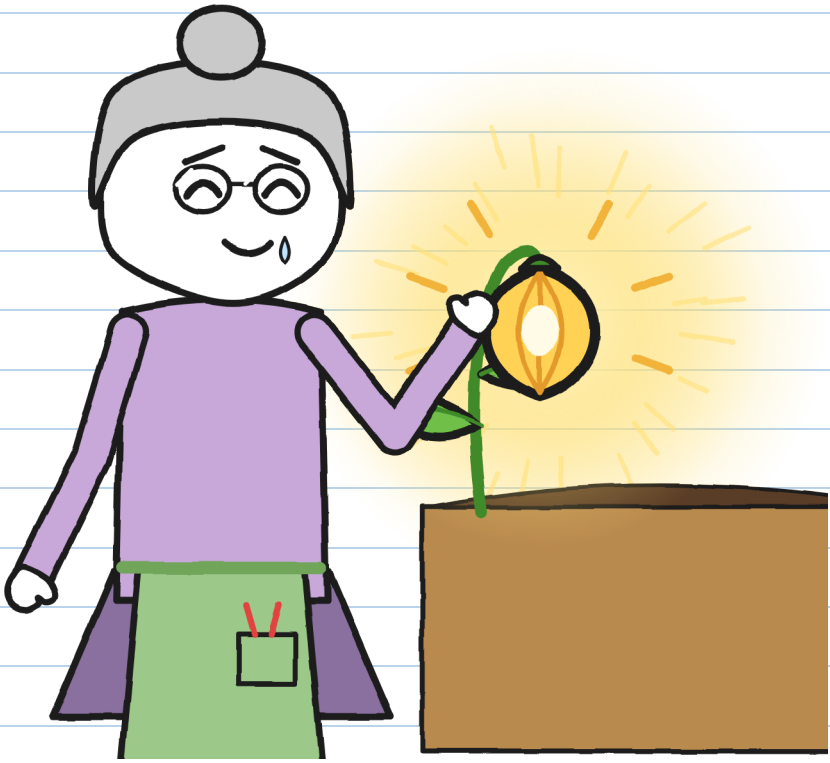

ほおずきが七つ、中にいなびかりのかけらが。

パンくずはヒックしなかった。口をあけてほおずきを見ていた。ぼくと同じだ。もうこわさをまねしていない：これをまねしていた。



フローラはしばらく何も言わず、やがて指でほおずきにそっとふれた。長いあいだ待っていたものにふれるように。

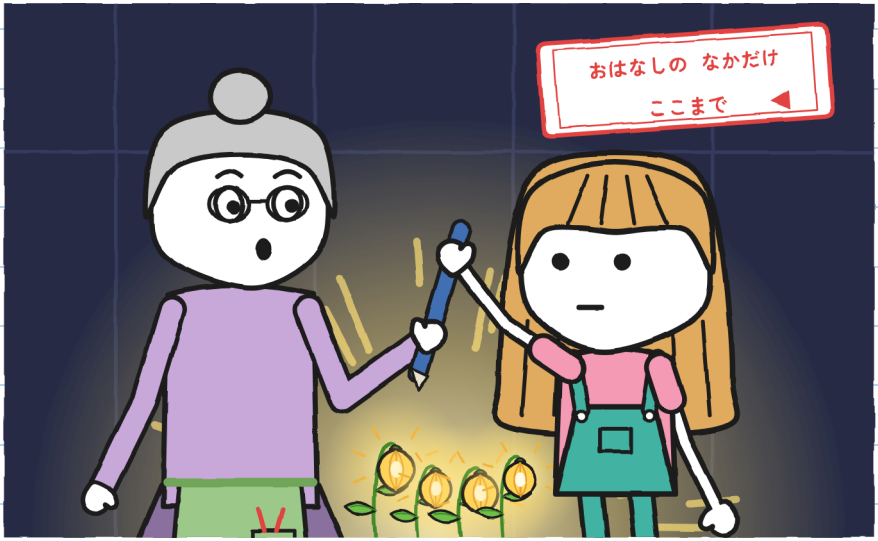
「うんがぞいの道は、こんなふうだった」と言った。



ぼくもさわった。パンくずも。日なたの石みたいにあたたかかった。

フローラはハンドルを回して雨を止めた。それからペンを出した。
やっとサインだ。
フリータは指二本で止めた。
「まだ。八つめがいない」

ほおずき七つを見た。
「わたしがびんを早くあけたから。さがさなきゃ」
それから台所へ行って、箱のラベルをはがし、オーバーオールのポケットにしまった。

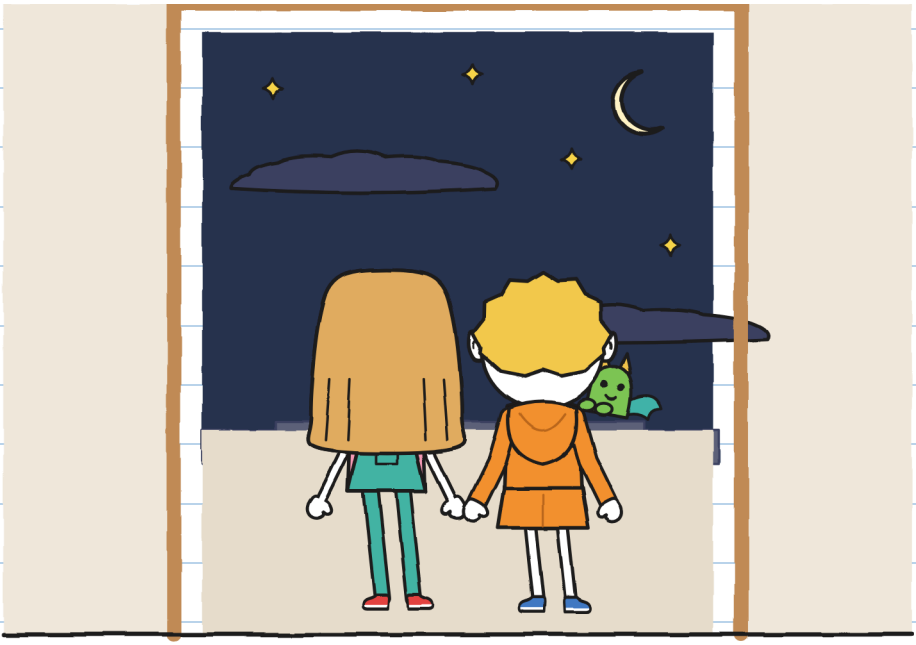


とどけるなら、ぜんぶ。 —J.

台所にもどった。

「庭の戸はしめたままだ」とフローラは言った。「まだ外には出ないよ」

フリータが数えるいなびかりがなくなるまで待ち、それから最後のかみなりからさらに三十分待った。もう雨はふっていなかった：あらしは行ってしまった。



そして八つめは外にいる。どこかのくらやみに。土が間に合わなければ、またねむってしまう：ただの石だ。サインがなければ、夜明けに2番はたなにもどってしまう。

「さがしに行こう」とフリータは言った。

フローラは夜を見て、へいを三回たたいた。ベラさんが言っていたとおり、それはドラゴンの家のかべだ。



「今度は」と言った。「あなたたちだけじゃない」

第6章

やっつめ

フローラとベラさんと、ランタンと自転車で出た。フリータはからのびんとラベルを持ち、ぼくはパンくずをレインコートに入れて、頭だけ出していた。

庭を、小道を、うんがのふちをさがした。

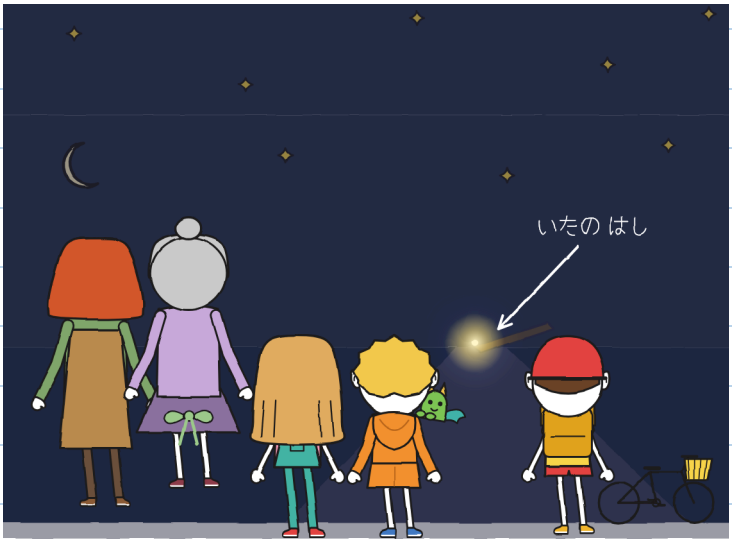


何もない。

八つめがねむってしまったなら、あの石のどれでもありえる。

ランタンの光で、ぬれた石がきらきら光っていた。
そのとき思った：さいたばかりのほおずきは、ほんの少ししか光らない。ぼくたちのあかりがかくしているのかもしれない。
「待って。あかりをぜんぶ消して」

トニョは自転車を止め、ベラさんはランタンの火を小さくし、フローラはライトを消した。



ぼくたちはじっとしていた。
道のおくに小さなあかりがあらわれた。いたのはしのふもとだ。


たぶん、雨が八つめを小道から道までながしたんだ。二つの石のわれ目に、指一本ぶんのぬれた土。いたのはしがはじまるところで、ひとりで根づいた。遠くからは小さなあかり。近くでは、ぜんぶをてらした。

フリータは長いあいだはしを見ていた：あかりがあるとちがって見えた。みじかくて、広くて、水より木のほうがずっと目立った。

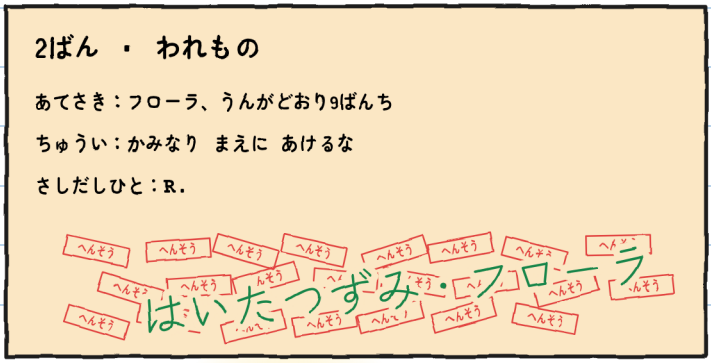
はしに足をのせた。一本だけ。それからひいた。

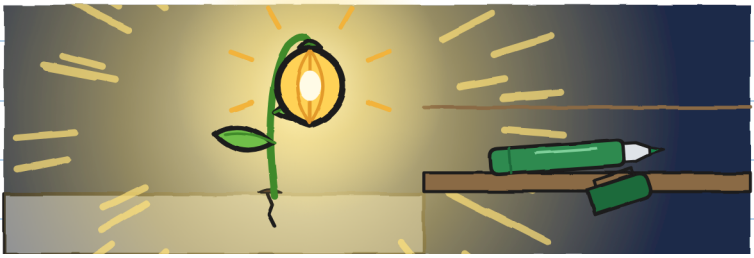


遠くからは、もうこわくない。近くでも、ほとんど。 —J.

「この子はここにのこる」とフローラは言った。「自分で場所をえらんだ」

フリータはラベルとみどりのペン、きえないインクのペンをわたした。フローラは八つめのあかりのもとでサインして、ペンを返した。





げんかんで別れるとき、フローラがざるをくれた：「持っておいき。次のあらしのために。それと、マラに言っておいて。やっとだね、って」

ベラさんはパンくずを巣にもどし、ぼくたちをバンで送ってくれた。自転車はうしろに。道路のはしを通った：夜はおおはしが船のために上がるから。店の前でおろして、ドラゴンたちのところへもどっていった。

店はくらかった。カウンターにマラさんはいなかった。

カウンターの下にいた。



「もうすんだ？」とマラさん。
「とっくに」とフリータ。

マラさんはもうふと、みみあてと、ヘルメットがわりの小なべを持っていた。

二十三回の配達で、あらしの日は一度もなかった。ようやくわかった。
フローラのことづけを伝えると、マラさんは小なべをまゆげまで下げた。

「ぼくもかみなりがこわいんです」と言った。
マラさんはもうふをもちあげた。



ぼくもカウンターの下にもぐった。ちょうど入れた。

マラさんはトニョに、スツールのとなりにひっくり返した箱をおいた。
「あなたの場所。今のところは」とマラさんは言った。

トニョはすわって、フリータのペンで、小さな字に二つ言葉を書き足した：「ねこも」。



今は、小さい字が本当のことを言っている。 ー J.

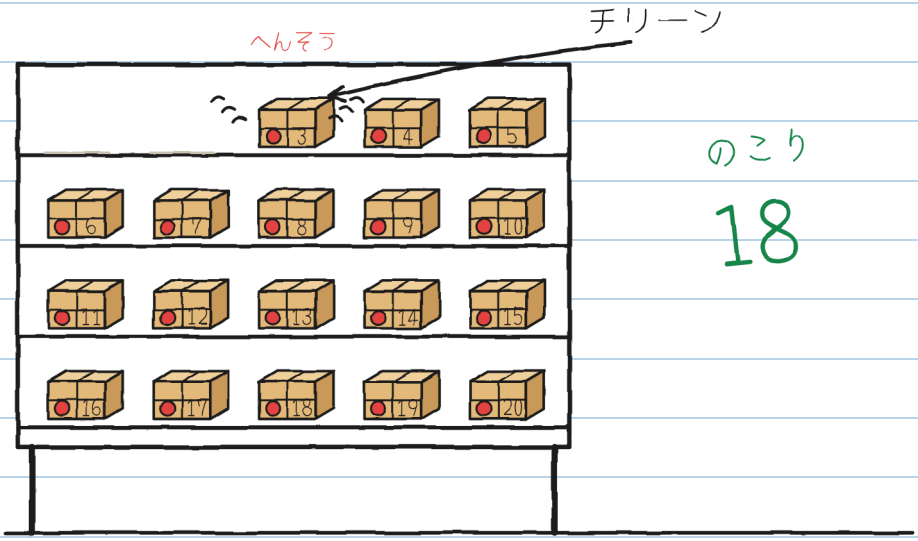
かみなりのためのぼくのプラン、直した：

1. ぞうを数える。
2. だれかといっしょに。
3. ヒックが出ても、だいじょうぶ。

のこり



そして、何かのハンターだと言わないこと。 —J.

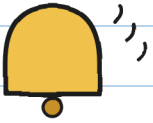


その夜、帰る前に、もどってきた荷物が一つ鳴った：チリーン、小さなベルみたいに。3番だ。

ラベルにはこう書いてあった：

3ばん

トニョちゃんへ

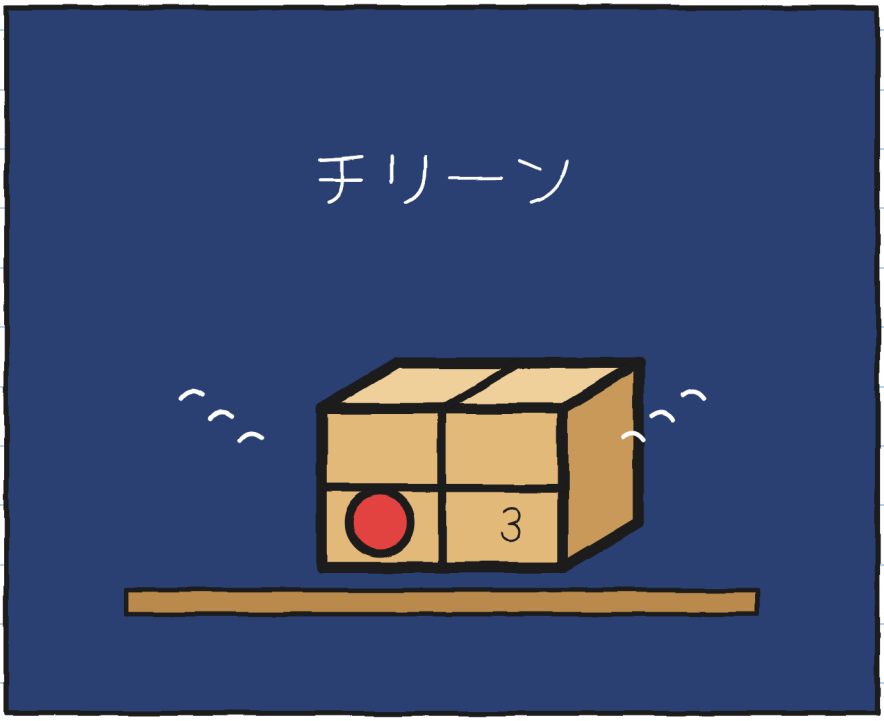


トニョの顔は、ヘルメットと同じ色になった。



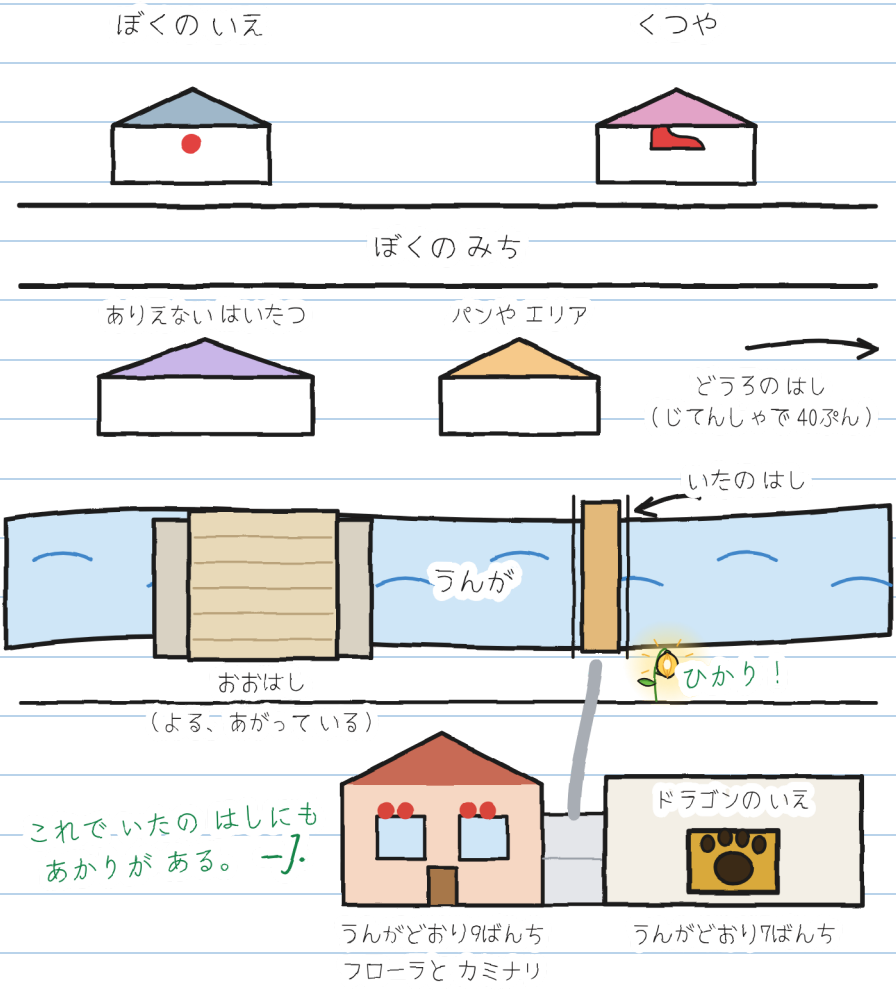
ありえない はいたつ ・3

（もうすぐ）



だれがトニョに荷物を送ってくるの？ ―J.

まちの ちず（バージョン2）



R.のカードがある。さいしょの手がかり二つはノート1の。新しいのを書いた：

R.について わかって いる こと



R.

1. ものすごく じが きたない（マラさん）。
2. ベラさんは イニシャルを よんで まっあおに なった。
3. ずっと まえ、フローラと ほおずきを うえて いた。
4. おそくても、やくそくは まもる。
5. フローラの まほうの ガラスを つくった。
6. だれも名前を言わない。それも手がかり。 —J.

きみは？R.はだれだと思う？

わたしは、R.は たぶん……

ひとつの おはなし、むっつの サイズ

サイズは六つあって、3さいから16さいまで。ことばは20いじょう。**XXS**、**XS**、**S**、**M**、**L**はページも絵も同じ。**XL**は小説。ちがうのは話し方だけ。

サイズ XXS · PRE-A1
フリータが ななつめの たねを つかまえる。

サイズ XS · A1
ゆかに たねが ひとつ のこって いた。フリータが つかまえた。ななつ。

サイズ S · A2
また いなびかり。ゆかには たねが 一つ のこって いた。フリータが つかまえた。七つ。

サイズ M · B1
次のいなびかりで、ゆかにのこっていたのはたねが一つ。フリータがつかまえた。七つ。

サイズ L · B2
また稲光が光ったとき、ゆかにはたねがただ一つのこっていて、フリータがつかまえた。七つ。

サイズ XL · B2–C1
イラスト小説・13+
CEFRのレベルは目安です。

みんな自分(じぶん)のサイズで。おなじあらし。 —J.

おうちの ひとと せんせいへ

linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

本当の あらし：どうする？

1. かみなりが聞こえたら、遠くても家の中へ。かみなりはもう、あなたのところまで落ちてくるかもしれない。
2. おとなの人といっしょに中に入り、まど、ドア、ガラスからはなれる。温室、はし、木、水には近づかない。
3. さいごの かみなりから 三十分は 外に 出ない。
4. ぞうを数えると、かみなりが近いか遠いかがわかる。おちつくのにもいい。でも、いつ外に出ていいかはわからない。

あなたの あらしを かぞえよう

いえの なかで：いなびかりから かみなりまで、ぞうを かぞえる。

いなびかり	ぞう	キロメートル (3とうで1キロ、だいたい)	あの いなびかりは、ちかい？ とおい？
1	15	5	—
2	9	3	もっと ちかく